

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

# COCONUTS CLUB

APRIL  
2019

4

伝説の里、三和めぐり  
〜後編



# 伝説の里、 三和めぐり

後編

前号に続き、常滑市北部の三和地区で昭和初期に発行された「郷土讀本 傳説篇」を取り上げる。今からおよそ八十六年前に編まれた伝説集には、ふるさとのように描かれているのか。実際に歩いて探ってみよう。

## 郷土讀本

## 傳説篇

郷土讀本 傳説篇

昭和8年(1933)、三和小学校の前身である三和第一尋常高等小学校が発行した児童向けの冊子。三和在住の郷土史愛好家のグループ「郷土研究会」が、小学校と協力して制作した。全50ページに47本の話が収められている。

### 久米に現れた龍の話

三和地区の風景は穏やかだ。適度な起伏、適度な平地、適度に密集する人家、遠くに見える伊勢湾と鈴鹿の山並み。いろいろな要素があいまって、何とも言えない安穏な空気が生み出されている。三和の農村は、知多半島の象徴的な風景である。

そんな三和の景観的特徴のひとつは里山であろう。前回でも紹介したとおり三和地区は矢田、久米、前山、石瀬、宮山、小倉という六つの集落から成っているが、海に近い平坦地の小倉を除くと、いずれも里山と集落が密接につながっている。特に久米などは、少し離れた場所から眺めるとなかなか面白い。半島の中央部から伸びてくる細長い山の斜面を埋めるようにして家々が身を寄せ合い、その山裾の尽きるところが集落のいちばん外れである。前山と宮山は文字どおり山と一体化したような集落だし、周辺にはいくつもの小さな山がぼこんぼこんと盛り上がっている。

ということ、まずは山が出てくるお話から。

#### 二六 龍現山

久米の今の寺山に、昔、龍があらはれました。どうしたものかそれから其の附近

には大小の蟻が多く、人々は大そう苦しみました。

文明の頃眞宗の或僧都が、これを聞いてあはれに思ひ、此所を拓いて水田にしました。そして名づけて蟻田といひました。

その龍の現はれた山を、誰言ふとなしに龍現山といふやうになりました。盛泉寺の山號を龍現山といふのも、これによるのであります。

久米に「寺山」という行政地名はないが、蟻田ならある。三和小学校から東へ数百メートルのところの小字で、東西約六百メートル×南北約二百メートルの水田地帯だ。人家は一軒もなく、周囲は小山に囲まれており、少し東のほうに進んで軽い山越えをすれば半田市域に入る。人里から遠く離れた半島中央部の山は、昔であれば寂しく怖い場所だったであろう。それこそ龍が出てもおかしくないような…。

かたや盛泉寺は、久米の西の端にある浄土真宗寺院で、県道252号大府常滑線の久米交差点近くにある。寺の山号は、この話に記されているとおり「龍現山」という。文明の頃(四六九〜八六、応仁の乱の頃)に蟻田の水田を開いた「眞宗のある僧」というのは、盛泉寺の僧のことだろうか。

盛泉寺を訪ねてみた。境内の建造物

### 久米の鑄物師の話

盛泉寺が出てくる話をもうひとつ。

#### 二一 鑄物師武兵衛

昔、久米に武兵衛といふ名高い鑄物師がありました。近衛天皇の御代、武兵衛の祖先は近江の天津に住んでおりました。其頃鶴といふ怪物が、毎夜宮中に現れて、ご病氣の天皇を御苦しめ申しました。天皇は源三位頼政に鶴を退治することを御命じになりました。

其夜になると、朝廷では庭に金燈籠をともして、宮中を畫のやうに明くし、頼政は弓を持つて、鶴の現れるのを待ち構へておりました。やがて宮中へ鶴が現れると、俄に風が起きて、多くの金燈籠は消えてしまひました。しかし武兵衛の祖先のつくつた金燈籠だけは、明く輝いて、鶴の姿をはつきりと輝し出しました。待ち構へてゐた頼政は、直ちに矢を放つて鶴を射落しました。

それから天皇の御苦しみはなくなつたので、武兵衛の祖先は其賞として、日本國中何所の土地で鑄物師を営んでも差支えがないという宣旨を賜りました。其後武兵衛の子孫は、何時の頃からか久米に移つて、鑄物師を営むやうになりました。武兵衛の祖先に賜つた宣旨は、今でも盛泉寺に保管してあります。

のどかな村、のどかな里山。ここにも数多くの伝説が眠っている。



三和小学校の西側から望む久米の全景

この「源頼政の鶴退治」は有名な物語だ。原典は平家物語の巻第四に収められている話で、江戸時代には歌舞伎や浄瑠璃の演目にもなつて庶民にも広く知られた。源頼政は平安時代末期の武将。鶴とは、顔が猿、胴体が狸、手足が虎、尾が蛇という異形の怪物。これを弓の名手である頼政が射落としたのだが、そのとき助けになったのが、鑄物の名工として名を馳せた武兵衛の祖先だといふのである。もちろん今は久米に鑄物師などいない。言ってみれば、久米の鑄物は伝説的存在だ。この話には、武兵衛の祖先が天皇から賜った営業許可証(＝宣言)が盛泉寺に保管してある、と書かれている。そこで盛泉寺を訪ねて住職の都築弘昭さんに伺つてみると、そういうものは残されていないとのこと。宣言そのものも伝説なのだろうか。

しかし、かつて久米に鑄物師が存在したのは確かである。その証明となるものが寺にあるといふので、見せていただいた。

ひとつは鰐口。これはドラ焼きのような形をした仏具の一種で、寺の本堂や神社の拝殿の軒に吊り下げてあるのをよく見かける。お参りする時、長い綱を下から打ちつけて音を出すものだ。

寺に保管されている鰐口は江戸時代初期の寛永十八年(一六四二)に鑄造されたもので、今は箱の中に大事にしまわれ

勅使とは使者のこと。蓮台寺は、小倉の真ん中に堂宇を構える古刹で、古くは一山十七坊を有した大寺院といふ。後花園天皇は室町時代の二四二八(一六四四)の在位。寺伝によると、後花園天皇より少し前の花園天皇(在位二三〇八(一八一八)の勅願所として繁栄し、橋の名の由来は花園天皇の勅使とのこと。「郷土讀本」の記述が正確かどうかはさておき、六百年も前から橋の名が使い続けられているといふのは驚異的ではないか。

上古橋は、勅使橋の北およそ四百メートルの矢田川に架かる橋。花園天皇(あるいは後花園天皇?)が退位して上皇になつてから通つた橋、というわけである。橋へ行つてみると「上皇橋」「昭和54年3月改築」と記された銘板があった。本書が発行されたときには「上古橋」だったのが、伝説にならつて「上皇橋」と改めたらしい。

本書にはもうひとつ小倉の橋で「人斬橋」という話も載っている。大野城があった時代の処刑場に由来するとのことだが、今はその橋はない。

続いて、橋ではなく坂道にまつわる話を二つ。

### 三六 塩見坂

前山の郷を出て、榎戸道を少しのぼると、直ぐに小さい池の側へ出ます。池の側を通つて、坂を上ると、西の方に青い海

ている。そつと取り出して見てみると、裏面に「尾州智多郡久米村」「大工藤原朝臣片山兵左衛門尉」との刻印が読み取れる。

もうひとつは、江戸時代後期の天明七年(一七八七)に鑄造された高さ約十センチの仏像。釈迦が生まれた時の片手を挙げた姿である「誕生仏」だ。こちらも普段はしまわれているが、毎年五月八日に行う灌仏会(釈迦の生誕を祝う行事)のときには花御堂に祀り、お参りに訪れた地元の人たちが甘茶をかけているといふ。

### 橋の話と坂の話

久米の鑄物師の話に近衛天皇が出てくるが、本書には天皇にまつわる話ももう二編収められている。

### 三四 勅使橋

小倉の郷はつれ、今の西木屋のすぐ西に勅使橋といふ橋があります。第百二代後花園天皇の御勅使が、蓮台寺へお出でになつた時、それまで粗末な橋であつたのを立派な平橋にかけかへたのださうです。それからこの橋を勅使橋

寺に伝わる遺品は語る。「久米に鑄物師は確かに存在した」と。



盛泉寺



久米の鑄物師が手掛けた鰐口



久米の鑄物師が手掛けた誕生仏



盛泉寺の手水舎

水がよく見えます。この坂が名高い塩見坂です。今はこのあたりは桑畑になつて

ますが、昔はこの近くに、浄泉坊とよぶ大きなお寺がありました。親鸞上人が關東から京都へお歸りになる時、この浄泉坊へおよりになりました。そして塩見坂へおいでになると、西の海がよく見えました。それで其後此所を塩見坂とよぶやうになりました。

### 三九 鎌取坂

昔、宮山のある百姓が鎌を持つて田圃へ行ききました。そして今の鎌取坂の所まで行くと、追はぎが出て来て、その鎌を取つて行つてしまひました。それからその

坂を鎌取坂と言ふやうになりました。

大野城跡から常滑市体育館、常滑高校にかけて小高い丘が伸びており、三和地区と鬼崎地区を隔てている。塩見坂も鎌取坂もこの丘を越える坂だ。

塩見坂の「塩」は汐潮、すなわち満潮の海のこと。現在も前山に「字汐見坂」といふ小字として地名が残っている。圃場整備によつて昔の道筋が失われているため、どのあたりが「塩見坂」なのか今となつてはピンポイントで指し示すことができないが、おおよそ、県道252号大府常滑線の常滑高校北交差点のあたりであらう。県道は丘を削り高低差を少な

と言ひ、何故かこの橋のかけかへには、久米・前山の馬方が必ずお手傳ひに出たものだといひます。

又牟山堂の方へ渡る橋を上古橋といひ、上皇様がおしひびで蓮台寺へお詣の時お通りになつたのだと言ひますが、或は上皇橋と言つたのが、つまつて上古橋となつたかも知れません。

勅使橋が架かっているのは、大野と小倉を隔てる前山川。この橋が通る道は大野から小倉、久米を経て半田市亀崎に至る黒鉄街道で、いわば三和地区の最重要幹線道路だ。

上皇橋の銘板



矢田川と上皇橋



前山川と勅使橋



盛泉寺の境内にある「あかざり薬師」堂



「塩見坂」の推定地





塩見坂から前山諏訪神社を眺める



昭和の伝説は、平成を経て次の時代にも語り継がれてゆくだろうか？

「前山のお宮」の巨木

くして道が造られているので、海もあまり見えない。しかし、交差点から少し南に入り、丘の頂上にある体育館付近の畑から西を眺めると、鈴鹿の山並みを背にきらめく伊勢湾が一望できる。まさしく絶景、穴場のビュースポットだ。親鸞聖人もこの美しい風景を堪能したに違いない。その塩見坂の北に、近年「北汐見坂団地」が造成された。海の眺めが見事な新園」という児童公園が整備されており、

その東には宮山の集落に続く細い坂道が伸びている。これが本書に出てくる鎌取坂であろう。公園の名前が「かもとり」となっているのは、公園のある場所が団地造成以前は「常滑市金山宇鴨取坂」という住所だったから。地名には当て字が多いので、この坂で鎌が取られたのか鴨を獲ったのか、本来の意味はよくわからない。よくわからないといえば、最後によくわからないけれどちょっと怖い話を。

この話はいったい何を意味しているのだろうか。本書が刊行された昭和の初め頃は、まだ神隠しや祟りのような不可解な現象が信じられていたらしく、このようなホラーめいた話もいくつか掲載されている。いずれ機会があれば、知多半島各所からそうした話を集めて昔の人の精神性を探ってみたい。

四四 天狗にさらはれた子供……………

今から四十年ばかり前に前山の御宮で、子供が四五人遊んでゐたら、突然白衣の老人が現はれました。子供の中の一人が禮をする、老人はその子供をつれて姿を消したので、ほかの子供たちは皆逃げかへりました。

その子供は天狗様につれられて郷西の川堤へ行くと、天狗が「今からうなぎをとつてきてやるから待つて居れ。」と言つてわきへ行つたので、そのすきに逃げ歸つたが、それから五六年後に死んだといふこととあります。

この天狗はお宮様の木の上にすんでゐて、毎晩笛や太鼓をならして居たが、たまに日中子供などが遊びに行くと、木からおりて来て一つかみにつかんで行つて、女の子だと木の先にひつかけて置き、男の子だと田圃のあぜにすゑておいて、うなぎやどぢやうなどをとつて来て、育て、いたといふこととあります。